

「百瀬文さんと村田紗樹さんの作品について」 vol. 2

収録日：2013年2月20日

収録場所：switch point

参加者：百瀬文×村田紗樹×森田浩彰×永田絢子×富井大裕

進行：末永史尚

(音楽)

(音声フェードイン)

富井「結構ね字幕...、あ、俺がしゃべんないほうがいいか。」

末永「あーいいよいいよ(笑)」

富井「結構字幕っていうのが二人にとって結構重要なキーワードになってる気がするよね。」

末永「ああそうだねえ。」

村田・百瀬「うんうん。」

富井「映像における字幕の問題とか、どっかそこ...がこう上手く二人とも効果的に、意図的に使ってるっていうのがあって、結構それがわりと...単なる抒情的なものにはならないっていうかね、聾啞とかその...あの一目が見えないということって、結構下手すると本当にウェットなものになりがちになるし、そっちのほうに、まあ行きがちになるんだけど...、あんまりそうになってないっていうのが、まあ編集とかの画面の切り替えとかもそうかもしれないけど、やっぱり字幕...によってその、編集なりいろんなものが、字幕を機になんかコントロールされてるような感じを受けてるんですよ。」

末永・村田「うーん...」

富井「だからその字幕についてはどう思うの？まあ二人とも映像を使ってるっていう意味では字幕はやっぱり意図的に考えなきゃいけないだろうし...、字幕のことってどうですか？」

村田「私はでも字幕といっても、えーっと.....、単純にその男性...その作品に仕上げたときに、映像にしたときに、えっと、まあ確かに...ちよっ、あの...、男性の方が忙しくて当日来れなかったんですけど、見れなかったんですけど女性の方も...、あの一、実際その、完全に...け、けん...、健聴者と、健...視者？目が見える人向けに作品は、最終的にできあがって...、でそ、その問題っていうのが、私...は、うんなんだろ.....、結構最後...最後の方で気づいてというか...、あ、なんだろう...わりと前の段階から、聾者の方と、聴者の方に...、あの、作品は、に参加してもらおうっていうのは考えてたんですけど...、何かこう...、ウェ、ウェットなその...結構ギリギリなところ.....っていう点で...、私は以前あの一...障害者の方のアート...の、についてのトークに行ったときに、結構違和感を感じ...た経験があって、えっと...あの一...、アーティストの方と障害者の方で、一緒にコラボレーション作品をつくるみたいな、作品だったんですけど、そのときの、トークで、なんかあまりにもすごいし...まあ度合いにもよるんですけど...障害者の方の、えっと一...すごい障害者の方を、あまりにも腫物に触るような、扱いを...なんかトークの中で感じて、あの一.....なんだろ.....うーんなんか逆にその、な、その、形態として、その作品のでき上がり方として、あの一、しょ...障害者、障害者の方と作品をつ、えーと...、その方は、その障害者の方は、あの一...なんだろ...視覚障害者の方だったんですけど、その方と、野球、一緒に野球をして、で、えっと一...、その方の野球の制服をつくったりとか、制服をつくったり、えーと...キャッチボールをしたり、一緒に走ったりと、一緒にグラウンドを一周走ったりとか、バ...バントをするとか...、なんかそ、それでトークの中で、障害者の方と僕たちは別に一緒のことができて...、なんか.....その作品を見ただけでは、この人はどういう障害なのかとか、どういう.....えっと...人なのかっていうのが全然伝わってこなくて、その障害を取り、取り消そうということで...逆になんか、それが.....私はすごい、そこに私は

すごい違和感を持って、障害者の方を扱うなら.....扱うならっていうか、作品の中で出演させるなら、その障害者の方を、障害者として提示されてるなら、その人がどういう人で、どういう...障害を持っていて、どういうふうに住んでいるのかっていうのが...、見たい...と思うのに、それをこう...封じ込めることで.....なんか.....うーん...すいません、うまい言葉が出てこなくて（笑）」

末永「（笑）」

村田「違和感があったので、」

末永「うん。」

村田「その、ちょく...えー、障害者を使うっていう上について...上で、あの一、障害を.....うーん...、ちゃんとわかる形で作品、にはしたいと思っていて...、で、こう.....」

百瀬「なんかそれはやっぱりさっきの、動機とも繋がるっていうか、あくまでその物語としてのディスコミュニケーションを扱おうとしてるってことですか？」

村田「多分だから、そこ...そこで、えっと一...、ちょ...、ちょ、聾者でも、盲者でもない人に対して、その二人を紹介するような形で、見せたかったから、私も、その、二人と会話をしたし、えっと一...その二人...、二人が向き合ってるんだけど、同時に、その、えっと一、見に来た人たちにもしゃべりかけてるような、その中で見てる人を通過して、その二人がしゃべってるようになっていう...、ふうにもみせたかったので、あくまでその聴覚障害...の方の、えっと、字幕っていうのは...、その耳が聞こえる人が、手話は見えないから、手話は分からないから、えっと...その字幕を通して彼の言いたいこと...とか、伝えようとしていることを見る...っていうつもりで字幕は入れていて、だから私は全然...手を入れてないし、彼がパソコンで打ち込んだ言葉をそのまま字幕にただけだから...。」

富井「あくまでもサポートとしての字幕なわけね。」

村田「そうですね。」

森田「それ最初、だから、村田さんはインストールーションとして作ってるというかね、百瀬さんは映像として作ってる、その違いは結構...でてるんじゃないかなーと思って、その字幕に関しても。」

富井「そうだね。」

森田「字幕...があるっていう、まあその、作品の構造自体がその...まあ、聞こえない人...に対して、と話すっていうことだから、その字幕をつけるっていうその、え...映像作品としての構造を前提になんかそれを作ってるっていう、百瀬さんの、そういう感じがする。村田さんは正に、その、まあ、あくまでパーツとしてというか、インストールーションのパーツとして作ってるっていう...扱いは結構違うなっていう。」

富井「YouTubeで観たからかもしれないね。両方が同時に起きているから。」

村田「はい。」

富井「音声があるのに字幕が無いっていうのと、あの、音声が無くて字幕があるっていうのが、同時にくる...で、多分そこで見え方の違いもひょっとしたらあるのかも。」

森田「あれ凄い面白いなって思ってた。」

富井「そうそう。で、だから、その後百瀬さんののを見てるから、余計そこに俺はちょっとビックリしちゃったんだろうね。」

百瀬「あー...。」

富井「多分それがインスタレーションであれば多分気にはならなかったんだろうけど...違う問題だと思ったんだけど。そう、ちょっとなんかね、同時に見たっていう事と、連続して見たっていう事が...結構その問題を割となんかこう...。」

森田「なんか韓流ドラマを思い出したよ、俺は(笑)」

一同「「(笑)」」

百瀬「よくわからない(笑)」

森田「えっ、韓流のドラマって、見てると字幕は付いてるんですけど、喋ってる言葉と字幕違うんですよ。」

富井「どゆこと？」

百瀬「えっ、それは...韓国語を喋って...？」

森田「いや、違う違う違う違う。あの一...日本語に吹き替えられてるんだけど、あの、その日本語で喋ってる言葉と、字幕って...まあ意味的には似てんだけど、ちょっと違うんですよ。」

永田「あー...。」

森田「だから、すごいなんか...面白い、変な違和感として、こう...こっちに残ってるんだけど。」

永田「それって...単純にこう、情報量をどれだけその時間とかスペースで入れられるかっていう...。」

森田「そうそうそうそう。声と、その、声を文字にする時に、えーっと、まあそこで誤差が...処理しきれない誤差が、その...意味内容の少しの変更として、なんかでてるんだけど、なんかそれと近い形で村田さんの、やつも、こう、声が出ていることと、でー、字幕が出ていることが...」

富井「なるほどねー。」

森田「しかもその二つが交わりそうになる時が、凄い変な感じがして。」

末永「うんうん」

森田「あの一...なんか聞きながら見てるから(笑) 非常に変な体験があって。なんかそういう...なんだろ。まあそれちょっとある意味内容的な部分と、そんなには関係...ひょっとしたらそこまで密接にはしてないのかもしれないけど、でも僕結構それで僕は面白い要素として、今回二回目見たときに...並んで見た方が面白いなって。」

村田「もしかしたら、あの、手話ができる方も、もしかしたら、あの...私、あの男性の方は...えっと、松田さん、じゃない...えーっと...名前忘れちゃった(困)...うん、男性の方は、手話を話していて、で、その後で訳をしようとしても、まるっきり同じには訳できない。ま、英語を、日本語にした時も、なんとなくこう、できない言葉とかを他の英語...日本語に置き換えて、えー、訳す時があると思うんですけど、手話を訳すのって結構難しいみたいで、あの、イメージ的な物だから、訳しきれない、って言った。」

末永「ああ、手話は手話という言葉なんだ。」

村田「だからもしかしたら手話が話せる方が、その映像を...あの男性の方の映像を見たら、なんとなく違う、っていうズレをまたそこでも感じるかもしれないです。」

百瀬「だから字幕の使い方がやっぱり違うのも面白いなって。なんか私の場合本当に構造にがっつき組み込まれているから。」

富井「そうだね。」

百瀬「そうですね。なんかその、実際に出ている音と、まあ字幕の内容が違う。でもその口の形が同じであるということでは一致している...。」

末永「うん。」

百瀬「なんかその...」

森田「あ、なんか今訛ってた。」

一同「「(笑)」」

百瀬「あー全然わからなかった(笑)」

富井「訛ってたか?(笑)もともと?」

百瀬「なんか、わかんなくなっちゃうんですよ。」

永田「へー。」

森田「自分で?」

百瀬「なんかこう結局、意味がなくなってくると、どこにアクセントを付けたらいいのかわかんなくなっちゃって。」

富井「あーそうかそうか。自分自身がそこでもうフリーになってっちゃうんだ?」

百瀬「そうです、もともとの単語がわからないと、どこにもともとのアクセントがあったのかよくわかんないから...音を読むだけになっちゃうから。でもなんとなく抑揚を付けようとするからなっちゃうんです(笑)」

森田「でもそういえばさ、『たまご』と『たばこ』...そんなちょっと重要じゃないかもしれないけど(困)『たまご』と『たばこ』のところが...くだりがあったじゃないですか。あそこで木下さんが言ってる所『たまご』も『たばこ』に聞こえるんだよね(笑)」

村田「そうですね。」

百瀬「そうなんですよ。」

富井「あれは音の体験として...えっと、彼が、得てないから...だから視覚的...口の形の体験としてのみ、それをなんかインプットしている。でも、でも、二つの意味がそこでやっぱり有るわけじゃないですか。」

百瀬「そうですね、だから字幕っていうのは結局あくまでその仮初めの音に、意味を...仮初めの意味を付けている...っていうか。結局どんな状況でも私たちは同じことをしてると思うんですよ。結局...まあ恐らくこの人はこういうことを言っているであろう、っていう作業は頭の中でしている。雑踏の中で人と喋らなきゃいけない時だったりとか、すごいぼそぼそ喋る人と話さなきゃいけない時だったりとか。私たちはその人の声を聞いてるんじゃなくて、頭の中で流れる音...声。声を聞いてるっていうこと...。」

森田「僕はなんか百瀬さんのやつを見てて、なんかすごい面白いなって思ったのは、結局その、耳が聞こ

えない人と、聞こえる百瀬さんが話しているというよりも、結局まあ木下さんのあの喋りの上手さとかもすごいあると思うんですね。結局コミュニケーションの問題っていうか...まあ僕、その一、ある特殊なコミュニケーションのことだけ扱ってるように見えて、結局はなんか、すべてのなんか、僕たちの問題だっていうふうな...」

百瀬「そうですね。」

森田「まあ、木下さんも多分そういう風に捕らえているところもあるような気がするんだけど。そこはなんか...非常になんか面白い...。で、...と同時に木下さんの話が面白すぎる（笑）」

一同「「（笑）」」

末永「かなり特殊だからね（笑）」

森田「村田さんの手話の人も凄いけどね。」

永田「うん、あの手話の人凄いいしゃべりだったよね。」

村田「ああ、そうなんです。表情...あの中でも言ってたと思うんですけど、やっぱり豊かで。」

末永「とても七分とは思えないほどのこう...情報量で。」

永田「まあ、単純にそれって、まあ、そのツースクリーンで、なんかまあ、皆で七分って聞いたときに、なんかすごい長く感じたね、っていうのは、」

末永「うん。」

永田「単純に、その字幕の情報と、耳から入ってくる彼女の音声と両方を、七分っていう一つの時間で体験したから、すごい長く感じた。」

百瀬「確かになんか、処理する...」

永田「そうそうそうそう。」

百瀬「作業が二倍になってるから。」

永田「そうそう、そうですね。」

百瀬「実際は十四分くらいの体験をしているかもしれないし。」

永田「そうそう。しかもなんか私たちがあの作品を見る場合って、どうしても、視覚的には、その男性の方をやっぱり見なくちゃいけなくて、男性の方の画面を見ながら、女性の声を聞く、みたいな。そういう風な見方にどうしてもなってしまう。」

村田「そうですね。」

森田「正にそう、インスタレーションではそういう風になってる。」

永田「そうそうそうそう、そうですね。」

村田「だからなんかお客さんの状況を見てると、あの、ほとんどの人が男性の方を見ていて、女性の方は全然見てない、みたいな方が結構多くって。」

永田「うーん。」

富井「あれはやっぱサンドイッチ状態になってなくっちゃだめなんですかね？」

村田「そう...。」

富井「昔、ダグ・エイケンとかね、こう...斜めのツーチャンネルとかスリーチャンネルとかっていう技があつて、」

一同「あー...。」

富井「それが、物理的な問題とかあるかもしれないけど。可能だったらこう...両方が一応視界に入るとかってこう、」

村田「あー...。」

富井「そういうことはこう、どうなんすかね。」

村田「そうですね、あの.....こう...空間があつて、壁に投影するんじゃなくって壁の手前に布か何かスクリーンを垂らして、そのスクリーンの、裏からも見え、...っと、見えるし...向こうがえっと、向こう側で映ってる人もみえるし...を...難しいですね、言おうとすると...スクリーンを、に...2枚のスクリーンを、裏側から...見て、向こう側の人の表側も見ると、みたいなこともできたらいいなあと思ったんですけど。」

森田「それ2枚じゃなくってもできるよ、1枚でも。」

村田「え、1枚...あ、それ重なっ...え？あ、それ...重なっちゃうから...じゃないですか？」

森田「ん、まあ...重なるけど...。」

村田「(笑) うん...。」

森田「んまあ、どっちみち重なるってことでしょ。」

村田「あ、うんまあ...そうですね。」

富井「要は視野に片一方が入らない状態にならざるを得ないことを...が、どこまでが是なのか非なのかっていうことですよ。」

村田「あー...。」

百瀬「うん...なんかこう、全然見え方が変わってきますよね...。」

富井「うん...そうそう。」

森田「僕もー...僕もそれ見たときに、インストール体験したときに、」

村田「うん、」

森田「絶対これ並んでた方がいいと思ってー、」

末永「うん...僕もそう...。」

森田「うん...結局、一方しかみない、」

村田「うん...。」

森田「...っていう状況が起きる...ってことは一、たぶん一、あんまり良くない...。」

村田「いや...。」

森田「でもこっち...、いや、しか...両方とも視覚的、僕らが一応まあ、見て、音も聴いているから、両方とも視覚的な情報があって、尚かつ一、その...視覚的な情報...を、...えっと...両方とも得られる環境にあった方が一、より...」

村田「うん...。」

森田「だから、こういう風に、こう...対面しなくても、会話してる感じに見えるし...、」

村田「うん...。」

森田「えっと、逆に...っていう風に考えたら、その構造...自体は...そんな俺は必要じゃないんじゃないかなっていうふうに思ったんだよね。」

富井「声だけとかね、」

森田・百瀬「うん...。」

富井「声で少し...。」

森田「うん、それだったらまだ...分かる...けど...。」

百瀬「なんか私、向かい合ってることの方が重要なんじゃないかって逆に思いましたけどね。」

森田「そう？」

百瀬「結局なんか背中を向けることによって声だけが聞こえてきてる、えっと、その目が、目がみえ...えっと、目がみえない女性と向かい合ってるときには、彼の声だけが聞こえてくる。」

森田・村田「うん...。」

百瀬「なんかそれって、...なんだろな...、なんかその...、彼女の知覚を一、」

村田「うん。」

百瀬「...そ、彼女をみながら体験するってことだから...、」

村田「あー、うん、そう、そうですね。」

富井「ふんふんふん...。」

森田「なるほど...。」

百瀬「だから、そこが大事だったんじゃないのかなって、思いますけど...。」

村田「うん...そう。」

森田「うん、でも僕らからするとさあ、じゃあ結局、男の人の方だけ見ちゃうじゃんってことになるじゃん。」

富井「背中に映像があるのに、見れない...っていう状態のこの不具合っていうのを一、」

村田「うん、」

富井「もうその一、ディスコミュニケーション、コミュニケーションっていう問題の中に意図的に取り込んでるんだったら一...挟み...でいいんじゃないんでしょうか。もしくはそれが、どうなんか、こう...どう、これが、意図として、...あの、ベストなチョイスだったのか、どうなのかっていうのが...ちょっと知りたい。」

村田「そう...そうですね...今、ちょっと百瀬さんが言ってたと思うんですけど...あの...その...入ったときに、入って見ているときに一、えっと...、男性の方の一、映像を見ていて一、字幕を追っていて一...そうすると女性の声しか聞こえないじゃないですか。その状況っていうのは一、えっと、...女性の方の一、体験を、あれ？女性...そうですね、女性の方の体験をしようと思うんですけど一...、な、なにかその、その人の立場で見てみるっていう状況をつく...りたいっていうのはありました。その...耳の聞こえない状態で、とか目が見えない状態でとか、...男性、えっと...女性の方を見ているときは男性の方は見れないし一、女性の方を見ているときは男性の方は見れないし...。」

百瀬「ただ、部分的にトートロジ的な構造もあると思うですよ。なんか、私も同じような部分があって一、なんかその、私の声が、無くなっちゃったときに一、...なんだっけ...、えっと、.....なんかその...声...私がこうしゃべっているときに一...なんだろう、イメージになった...、」

富井「うんうんうん...。」

百瀬「みたいな...、」

富井「うんうん...。」

百瀬「ことが...、」

富井「うん。」

百瀬「ま、字幕で出て一、で、私...が、実際こうやって、音のない映像として動く一、みたいなことは、結局、木下さんが、普段見ている視覚を、」

富井「そうだね、」

百瀬「鑑賞者にも追体験させよう、構造...を、意識しながらやったことで。結構その部分を、意識的に採用してる意味では、」

富井「あ一、そうだね一。」

百瀬「結構同じことしてるなと思って。」

富井「どうしても、両方あるけど見たい欲求と聞きたい欲求っていうのが我々は抗えないし、作品を見るっていうことと聞かっていうのはそのために来てるから一、」

村田「はい。」

富井「そうすると、聞いているときには見れない、で、見るときには聞こえない...っていう、」

百瀬・村田「うんうん...。」

富井「っていう、結局どっちかにいくと、どっちかが遮断されるっていう、状態...、」

村田「はい。」

富井「んーまあ、だからそれは、そういう風なことが多分明快な構造として...多分まあ、聞いている...なんつーか、説明聞いたげれば分かるんでー...、」

村田「うん。」

富井「むしろ、だから本当にそれがー、でもまあYouTubeだから両方が入ってるでしょ？」

村田「はい。」

富井「んでそれはそれで面白く...面白いものがでてくるんでー、」

村田「(笑) あ、そうですね、あの...」

富井「そういう...んまあ、なんつーの、んまあ、どっちなんだろうっていうのが、聞きたかったんだけどー。んでまあ、今の解説聞いてたら、まあ納得はできたかもしれない。」

末永「うん。」

百瀬「確かにその、全体が把握できてしまっているのかどうかっていうのは結構大事な...点というか。」

富井「うん。」

村田「...そうですね。あのー...今回卒業...あのー、五美大展の方で今回別の作品をだして...っていうのはー、そのー...ZOKEI展...あのー...卒業制作で出したー、今回のー、作品...っていうのは、インスタレーション込みで作品だと思っていてー、壁が...あるっていうことが凄い重要だと思っているのでー。...んでその壁っていうのはー、えっとー...その、通路、暗室の通路があるっていう話をさっきしたと思うんですけどー、その通路を通り抜けてしまったりとかー、あとは、暗い、あの、暗い通路だからー、あ、僕はちょっと怖いからやめときますっていう...反応の鑑賞者の方がいてー、で、その向こう側の映像を見ない人が結構多分いたと思うんですよー...。」

富井「はいはいはいはい...。」

村田「壁の手前でー...、で、それ...そのこと自体がー、その、聴覚障害の方が手話とかー、喋れないからー、こう...やり取りを...こう...拒んでる...拒んでしまう人がいたりとかー、...その...障害をー、壁...があることでー、その...やり取りっていうのをー、やめてしまうとか諦めてしまう人っていう...と...人の反応もー、その作品の中に組み込ませたくってー、」

富井「うんー...。」

村田「あの...壁っていうのは結構私の中では重要でー...。」

富井「なるほどねー。不具合を受け入れられる人しか見れないっていうことだよねえ。」

村田「んー(笑)、そう...そうかもしれないですねー。」

末永「ここでちょっとリスナー向けに補足説明すると...、今回えっと...百瀬さんとか皆にみてもらったバージョンは...、あ、村田さんの作品のバージョンは、...えっとー...インスタレーションをそのまま再現できないのでー、えっとー...1つの画面にー2つの映像を横に並べて、繋げているバージョン、だったということです。」

百瀬「それは...アーカイブみたいな感じですか？形って事？」

村田「そう...そうですね。割とあくまで今回その、百瀬さんにみ、見せる為に、えーと、2ついっぺんに再生して音と文字と、っていうのを全部。」

百瀬「それはやむを得ずって感じなのかな？」

村田「うーん、でも一、あの一、壁...あの一、インスタレーションになった時に壁の向こう側が、その、なんだろう...視覚、が、見える、あの一、目が見える、耳が見える...あ、耳が聞こえる、っていう人の壁が境目になっているので、あの一...、映像の中で時々横を向いている映像があったと思うんですけど、その映像はそのインスタレーション上で投影され...あの一、流れている時に、その壁の向こう側に向いているっていう風に投影してあるんですけど、その男性の方に向いている瞬間もあるし、その空間に入る前に諦めてしま...う、しまったりするような、その...けん...健全者というか耳の聞こえる、目の見える人に向けても喋っているという状況をつくっている。で、今回の並んでいる方は逆に、その、既にこちら側の...まあ目の見える耳の聞こえる人の方に喋ってるんだけど、時々こう、その、男性の方とか、女性の方にむか...向かい合って喋っている様に見えるっていう、逆...逆の事が起こっている。」

百瀬「うん。そう。だから全然見え方が違うなと思ったのはやっぱりそれで、彼、彼女にとっては、横を向いているだけなのに、この映像の中では彼らは対面している様に見えるっていうこと。だからやっぱりそこって全然違うんだなー、と思って...。」

富井「そうだねー...。」

森田「ただその空間の中にね、入って、体験した事っていうのがどれだけ映像の内容的に意味があるかっていう事を考えれば、俺はそこは結構ねー、僕は、あっ、ちょっと弱い部分だなーと思ってて、あの一、そんなに...空間に入りこむ...僕、空間に入っても体験したし、今回、えーと映像、まあいわゆる映像作品として二画面で体験した、うー...、まあ立場から言えば、今回の方が圧倒的に、か、あの村田さんがやっている事は、すごいストレートにスパッとなんか、いい...」

村田「(笑)」

森田「言い表されている気がして、で、まあその図式的には確かに、その...言っている意味はよくわかるけれども一、えーと...僕は正直そこに、そんなに意味は感じなかった。」

村田「うーん。」

森田「うーん...。」

村田「え、それは...。」

森田「だから映像作品として見た方が、面白いんじゃないかなと、僕は思ったのね。」

一同「うーん。」

百瀬「こういう形式で、もう、こ、こ、この状態を映像作品として出すっていう...。」

森田「そうそう空間の中にあ、その、ああいう、左壁は信じて下さいみたいな...、」

百瀬「ダブルプロジェク、ジェク、ダブルプロジェクションである必要はないって事ですか？」

森田「ダブルプロジェクションでもいいんだけど一、並んでた方が良くないかな。」

百瀬「ああ、方向を...。」

村田「あー...。」

森田「だから何か会話してる様に、配置するっていう事、じゃなくても、もうそういう風に見えるから一、で、その間に挟まれなくても一、で、あ、一方しか見ないっていう状況を作らなくても、えっと、やろうとしてる事って言うのはちゃんとできてる、と思う。」

村田「うーん...。」

末永「大体あの壁、教室の壁が4mくらい離れてたのかなあ。」

村田「そうですね。」

森田「もおこういうかん、大体の人は間に、間の壁に入ってこういう感じに見るんだけど、なんか...今回の方が良かったねえ。」

富井「うん、そういう意味では多間にインスタレーション、とも言えるよね。その空間に例えば壁が...わかんない、俺行ってないからわかんないけど、(笑)」

村田「(笑)」

富井「すごい近かったらどうなんだろうとかね。」

末永「うん。」

村田「はい。」

富井「それがやってあるんだったらそれでひよっとしたら回避されてる問題かもしれないし、挟んであってもね。うーん、こんぐらいあるとかさ、」

村田「うん。」

富井「もう極端な話。だったらひよっとしたら距離が離れていたからちょっと間隔が開かなかったのかもかもしれない。」

末永「そう、それもちょっとあったかなって感じがする。」

森田「え、今突然思い出したんですけど、小泉明郎くんの作品で、えーっと、目の見えない人、に、えーっと...。」

村田「裏表のやつ？」

森田「裏表のやつ。あ、あれっていうのは、あの...まあ、勿論、二つの画面で構成されてるんだけど、それは同時に見えないようになって、でも、あっち側の音だけすごい強烈に聞こえて、だからあっち側になにか、えーと、関係したことが起きているってのは強烈にこっち側を見て、あ、一方の画面を見てる時にも感じる...んだけど、でも...だからそれを確かめて、確かめたくてしょうがないっていう行動がやっぱ、つ...作られている...。」

末永「ああ...。」

森田「だからそれ、それは、結構こっちを見てあっちを見て、まああっちを見てこっちを見る人もいるかも知れないし、こう、空間を行ったり来たりして、比べながら見る人もい.....て、で、その2つは勿論関係してるじゃん？だからそれって、まさに空間的な体験だと思うんですよ。」

末永「うーん。」

森田「でも、そういう、空間的に映像を体験するっていう構造を、村田さん作っているにも関わらず、それが、今回、並べて見たことによって、別にあれ(笑)あれ無くても成立するんじゃない?というのが僕の意見で、(笑)。まあそれ、すごい形式的な話になるのかも知れないけども、むしろ、映像的に体験した方がすごくストレートに。」

富井「空間に置けた方が感覚のアフォードみたいなものがうまくできてなかったという(笑)」

森田「図式的には、図式的にはうまくできてたんだけど。」

末永「うーん」

富井「まあそこが具体的にヒキとしてちょっと...うーん、まあ映像で見ちゃった時の方が、2つ同時に見た方が、うまくいっている様に見えるってしまったということね。」

村田「そうですね...。」

(音楽フェードイン)

一同「うーん。」

森田「というのはまあ、僕の、印象ですけど(笑)」

村田「うーん...。」

(音声フェードアウト・音楽)